

福島市飯坂温泉の民家・町家の特質と 集落構成の変遷に関する調査研究

笹 原 理 美

Investigation and study on the characteristics of Minka and Machiya in Iizaka Onsen,
Fukushima City and the change of village composition.

Satomi Sasahara

The characteristics of the Minka and Machiya in the Iizaka area, Fukushima Prefecture, and the changes in the composition of the villages were clarified. There are many historical buildings in the Iizaka area, and it turns out that there are valuable monuments of high value. The Iizaka area was initially a rural area, but became a commercial area due to hot springs, and a ryokan area was formed to become a hot spring area. The appearance of the Machiya varied according to the age, and the style changed in response to the fire and technological advances. It is characterized by the fact that the Minka and the Machiya are in common, and the nature of the town, which was initially a rural village, influenced it.

1. はじめに

飯坂温泉がある福島市飯坂地区は、福島盆地北西部に位置し、12世紀には「湯の庄司」と呼ばれる奥州三名湯の一つとして知られた。飯坂地区には、歴史的建造物が数多く現存し、特に旅館^{注1)}や邸宅^{注2)}は価値が見出されて文化財となる建物も少なくない。しかし、元茅葺民家や瓦葺町家もみられ、これらは今和次郎により大正期に福島県最初の民家調査¹⁾が実施されたが、それ以降詳細な建物調査等はなく、源泉と集落との関係や町並みの変遷については検討されていない。

そこで本研究では、福島市飯坂地区の民家・町家を対象に、建物悉皆調査により残存状況を把握し、ファサードや平面形式、構造技法などの特徴とその年代傾向を明らかにすると共に、これらと源泉や交通網との関係を古地図や古記録を基に考察することで、飯坂温泉の集落構成の変遷を明らかにすることを目的とする。なお本研究の成果は、歴史的建造物を活かしたまちづくり政策の策定や観光資源の創出に寄与するものであり、調査成果により「旧採進堂酒店主屋・土蔵」は平成31年3月に国登録有形文化財(建造物)に答申され、今後の活用が望まれる。

2. 飯坂温泉の歴史

飯坂温泉の歴史は古く、ヤマトタケルが東征の際に鯖湖湯に入ったという伝説が残り、この地を治めていた佐藤庄司基治が「湯の庄司」と呼ばれたことから、12世紀には温泉が利用されていることが確認できる。また、元禄2年(1689)に松尾芭蕉の「奥の細道」によると「土坐に筵を敷てあやしき貧家也」²⁾などがあり、粗末な宿での出来事を記すことから、当時においては温泉街としての体制が整っていなかったことが窺える。享保14年(1729)の絵図^{注3)}によると、波来湯(十綱町)・滝の湯(西滝ノ町)・鯖湖湯(湯沢)・透達湯(湯沢)の4つの源泉があり、宿に内湯は少なく、外湯に入るのが一般的であった。寛政12年(1800)には、当時白河藩の飛領であった飯坂に白河藩主松平定信が領内巡見と湯治を兼ねて飯坂を訪れており³⁾、この時期には温泉地として知られる存在であったといえ、鳴子温泉と秋保温泉と共に奥州三名湯の一つとして認知された。明治28年(1895)頃の絵図^{注4)}には、波来湯・滝の湯・鯖湖湯・透達湯の4つの源泉が明記され、大正13年(1924)の絵図^{注5)}では十綱温泉が加わり、昭和2年(1927)の絵図^{注6)}でも引き続き5つの温泉が確認できる。現在、飯坂町には9つの共同浴場があり、本研究の対象である摺上川右岸の飯坂地区には、江戸期より確認されている鯖湖湯と波来湯の他、昭和37年(1962)に飯坂町財産区管理でつくられた大門の湯(大門)と八幡の湯(馬場)、昭和43年(1968)開湯で最も新しい十綱の湯(下川原)の5つが所在する。鯖湖湯は明治22年(1889)建築の日本最古の木造建築共同浴場として親しまれてきたが、平成5年(1993)に透達湯(平成4年廃湯)跡地に、明治期の共同浴場を再現した建物に再建された。以前鯖湖湯があった場所は足湯となっている。波来湯も平成23年(2011)に太鼓櫓付きの木造の建物に改築されている。いずれも温泉客のみならず、地元の人達にも親しまれている。

3. 飯坂地区の集落構成の変遷

飯坂町は、摺上川上流の右岸に位置し、その流れと小川に挟まれた段丘上に町並みを形成する。古地図等^{注7)}を参考に町の変遷をみると(図1)、江戸中期は、摺上川の右岸に町場が形成され、飯坂街道と鯖湖湯や透達湯といった源泉にほど近い湯町・湯沢・十綱町と名主や大庄屋格であった堀切邸

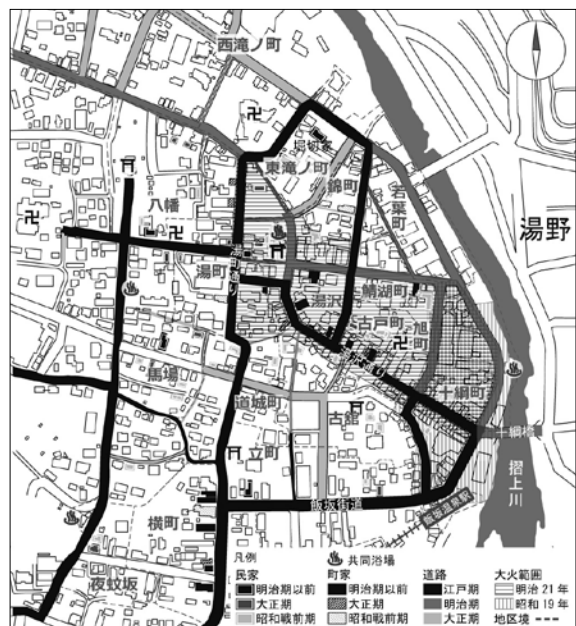


図1 飯坂地区の街道と民家・町家の残存状況

を中心に栄えた。慶長年間の邑鑑⁴⁾によると、74戸の小さな村で、桑・楮の栽培を主生業とする農村の性格が強い街村であった。

近代以降交通網が整備され、明治6年(1873)に摺上橋を架けて隣町の湯野と繋がり、明治15年(1882)には飯坂街道が整備された。明治17年(1884)には若葉町・錦町・花岡町に新道を切り、さらに天王寺道路が開かれてからは、町は急激にその方面に発展し、旅館街が整えられて中心地が移動した。明治21年(1888)の大火では湯町・湯沢・十綱町の270戸余が焼失し、被災後の区画整理により鯖湖町・旭町・錦町・古戸・若葉町が造られ、若葉町に遊郭が集められ、揚屋なども見受けられるようになった。明治期は、戸数800戸、人口5,000人に増加し、旅館も40軒を数える温泉街となり⁵⁾、正岡子規や与謝野晶子など多くの著名人が訪れている。また、内湯を持つ旅館は7軒、内湯を持たない旅館が8軒、加えて共同浴場5ヶ所が『飯坂温泉案内』⁵⁾(明治44年)に紹介され、温泉街としての性格が強くなった。一方旅館業以外の民家では、養蚕が盛んで、毎年7月31日に十綱町と立町で生糸市「権現堂の市日」が開かれ、現金収入が得られていたという⁵⁾。福島のみならず東京の糸商人も訪れ、町内の至る所にその家の紋や屋号などを染め抜いた大きな紺色の旗を立てられ、田舎の人々は養蚕をし、繭を生糸にして二把三把と背負って売りに来ていた⁶⁾。したがって飯坂地区は、明治期以降地区の東側の温泉街を中心に商業地化が進み、旅館街や遊郭街など地区ごとに性格が異なる町割りを整備して、農村と町場の機能を併せ持つ在郷町となった。

大正13年(1924)には福島駅から花水坂駅まで電車が開通し、昭和2年(1927)に飯坂温泉駅まで延伸した。大正期には、戸数1,100戸余り、人口5,500人に増加し、『飯坂湯野温泉史』⁷⁾には、湯沢第一の旅館として中村屋旅館(湯沢)を掲載し、また飯坂三大旅館として滝の湯温泉筋である花水館温泉(西滝ノ町)、角屋温泉(枕水楼、西滝ノ町)、榊屋温泉(西滝ノ町)が紹介されている。また、「町民の多きは商業若くは温泉宿を業とし、傍ら農工を営むあり」^{注8)}と記載され、併せて「摺上川の沿岸赤川の附近土地肥沃、塙瘠の均一ならざるも概して五穀桑楮に適す、皆灌漑の便を得、地上高燥なるを以て尤も養蚕に適す。」^{注9)}とあることから、養蚕に適した地域であったこと、サービス業のみではなく農業を営んでいる者がいることがわかる。昭和19年(1944)の大火では、湯野で出火し摺上川を越えて飯坂町に燃え移り、川沿いを北側からなめつくすように南側の飯坂温泉駅方向へと延焼した。その後、一般道が整備され、現在の姿となった。昭和中期には戸数約1,800戸まで増加し、共同浴場周辺に住宅が整備された。その内訳は、中・農家戸数342戸、商業が205戸、接客業が172戸であった。接客業は、旅館業が58戸、芸者置屋業が44軒であったことから、農業よりもサービス業に主産業が移行し、最盛期には178万人が訪れる温泉地として賑わった。

現在は平成30年(2018)5月の統計^{注10)}によると、世帯数2,783、人口6,000人で、飯坂温泉旅館協同組合の加盟店旅館が40軒(湯野も含む)みられるものの^{注11)}、廃業する旅館が多いのが現

状である。

4. 飯坂地区の町家と民家の残存状況

福島市飯坂町の17地区^{注12)}を対象に、外観目視による建物悉皆調査を実施し、調査事例474棟のうち、昭和戦前期以前の建築と判断できる^{注13)}民家51棟、町家29棟を確認した(表1、図1)。

町家は、飯坂街道沿いの横町・湯町と、温泉街と十綱橋を結ぶ湯沢通り沿いの湯沢・十綱町に集中し、特に横町は連続して現存する。建築年別にみると、明治期は湯沢・横町、大正期は湯沢・湯町・横町にみられ、江戸期以来の古い街道沿いに分布する一方、昭和戦前期は昭和19年(1944)の大火罹災範囲の十綱町に多い。

一方民家は、調査範囲ほぼ全域で昭和戦前期の建築が確認できる。明治期以前建築の民家は、馬場・立町・湯町・八幡・東滝ノ町の5地区にみられ、町家よりも事例数は少ないものの、広範囲に分布する。特に地区の西側に多く、江戸期の街道の裏手に位置する場合は町家の分布と異なる。大正期以降の民家は、明治期の大火範囲内である地区東側でもみられ、街道筋の町家の後方に分布する。昭和戦前期以降は地区全域に分布域が拡大し、共同浴場の整備と共に、その周辺の住宅地化が進んだことが現存事例からも把握できる。

表1 地区別にみる民家・町家の残存状況(数字は件数)

		夜蚊坂	横町	馬場	立町	道城町	古館	十綱町	旭町	古戸町	湯沢	鯖湖町	湯町	八幡	若葉町	錦町	東滝ノ町	小計
町家	明治期以前		5								6	1	1					13
	大正期		1								2		2					5
	昭和戦前期		1			1		5					3			1		11
	小計	0	7	0	0	1	0	5	0	0	8	1	6	0	0	1	0	29
民家	明治期以前			2	1								2	1			2	8
	大正期	1		2	1				1	1		1	2	2		1		12
	昭和戦前期	1		5	1	4	4	1	1	7	1	1	2	2		1		31
	小計	2		9	3	4	4	1	2	8	1	2	6	5	0	2	2	51

5. 飯坂地区の町家

(1) 全体傾向

町家の形式をみると(表2)、2階建ての切妻造トタン葺が殆どを占めるが、入口と下屋の有無は混在する。年代傾向をみると、明治期では2階建て切妻造平入が主流で、大正期以降、妻入が増加する。妻入は昭和大火罹災域の十綱町に多く(5棟)、いずれも間口が2.5~3.5間で狭いことから、区画整理後の間口が狭かったため、妻入が利用された可能性が高い。しか

表2 町家形式の年代傾向(数字は件数)

	入口		階数		屋根形式		屋根材		下屋あり	戸		2階前面窓			出桁あり	鎬あり	看板建築	
	平入	妻入	平屋	2階	切妻造	その他	瓦	トタン		全面戸	一部戸	出格子	窓	その他				なし
明治期	10	3	1	12	12	1	2	11	5	6	7	3	6	1	3	5	4	6
大正期	3	2	0	5	5	0	1	4	3	2	3	0	4	0	1	0	0	1
昭和戦前期	5	6	1	10	9	2	5	6	3	7	4	0	6	1	4	0	0	3
小計	18	11	2	27	26	3	8	21	11	15	14	3	16	2	8	5	4	10

し江戸期以来の道沿いにも少数みられ、間口3.5間以内で明治期からみられる。平入は間口4間程度であることから、同地区では平入町家が主流であるものの、間口が狭い場合妻入を採用し、昭和期の大火以降採用が進んだといえる。また、改造等により建物正面を看板建築とする例が10棟みられるが、それを除くと下屋付は明治期で多く(5/6棟)、昭和戦前期では少ないことから(3/8棟)、正面に下屋を設ける例は古式と判断できる。これらは明治期の絵図^{注14)}でも確認でき(図2)、下屋付の平入・妻入町家が明治期から混在していたことが窺える。

(2) 外観の特徴

以上の傾向を参考に、建築当初の姿を良く留めていると判断できる明治期建築の「旧採進堂酒店」(明治31年、湯沢、図3)、「旧舩権商店」(明治33年、横町、図4)、「柳屋本店」(明治41年、横町、図5)をみると、いずれも2階建て平入切妻造瓦葺で、前面に下屋を付す。出桁造で軒が深く、腕木には鎬を施し、2階窓には出格子を備える。この形式は、飯坂の町家が写る古写真や絵葉書でも数多く確認でき、福島県中通り地方や山形県の内陸部で多い形式である^{9・10)}。この形式は大正期以降変化し、建物の建ちが高くなり、正面に下屋を付さない形式で、格子窓はなくなり、軒が浅く鎬を付けない出桁造の簡素なファサードに移行する。

上記の点と異なる変化を遂げたものとして、昭和初期建築の旧タヤ金物店(横町、図6)が挙げられる。同建物は、飯坂地区で唯一現存する土蔵造町家で、屋根は置屋根の切妻造平入で虫籠窓を設ける。土蔵造



図2 『飯坂真圖』⁸⁾ 拡大図



図3 旧採進堂酒店(湯沢) ^{注15)}



図4 旧舩権商店(横町) ^{注17)}



図5 柳屋本店(横町) ^{注18)}



図6 旧タヤ金物店(横町) ^{注19)}



図7 M商店(立町) ^{注20)}

町家は、古写真^{注15)}によりこれ以外にも確認でき、M商店(立町、図7)は切妻造平入で、箱棟に似た大きな棟を持つ。土蔵造町家は、宮城県村田町村田などでは多いが、福島県中通り地方では少ない。これらが建つ地区は、二度の大火罹災域ではないものの大火後の建築であるため、防火意識の高まりにより土蔵造が建てられた会津若松市や喜多方市と同様の理由¹¹⁾であった可能性が窺える。

(3) 平面の特徴

次に実測調査により平面が判明する「旧採進堂酒店」(図8)と「柳屋本店」(図9)をみると、住人用の入口を桁側中央に設置し、1階正面にミセとL字型の土間を設け、その裏手に居住空間、ミセ上階に接客空間の座敷を配置する点が共通する。前者は整形四間取り、後者は食違い六間取りの平面で、部屋数と規模に違いがみられるものの構成は一致し、近世的な特色を残す形式を採る。確認が出来た旧採進堂酒店では小屋組みに近代以降普及したキングポストトラスが採用される点が特筆される。

6. 飯坂地区の民家

(1) 全体傾向

民家形式をみると(表3)、入口の平入、屋根形式の切妻造は共通するが、階数は平家建てと2階建てが半数ずつで、屋根材もトタン葺が多いものの瓦葺もみられる。年代傾向をみると、入口は平入で踏襲されるが、屋根材は瓦葺からトタン葺に移行し、屋根形式は切妻造を主流に寄棟造やあづま造、入母屋造などの多様な形式から、切妻造に集約される。ただし、階数は年代に変わらず平屋建てと2階建てが同数存在し、年代が下っても建物の2階化が進まなかった点が特筆される。注目されるのは、町家でみられた鑄を持つ出桁造が民家でも採用される点で、後述する「佐藤喜市郎家」(明治中期以前、馬場、図11、14)では、L字型に出桁を廻す形式で用いられ、近隣の板蔵^{注22)}においても同様の出桁造を採用する例がみられることから、特徴的な地域的技法といえる。しかし、町家でみられるような外観的特徴は他にみられず、これは町家が街道に面して建つため正面性を有す建物である一方、民家は道から離れて立地し、正面性のない建物であるため、外観に意匠的な特徴がみられないことが要因である。そのため、詳細な建物調査が実施できた「斎藤静子家」(江戸末期以前、八幡、図10、12)と「佐藤喜市郎家」で特徴を把握する。

(2) 斎藤静子家主屋

斎藤家は八幡神社の宮司を代々務める家柄である。主屋は飯坂八幡神社の南東に所

表3 民家形式の年代傾向(数字は件数)

	入口		階数		屋根形式		屋根材		
	平入	妻入	平屋	2階	切妻造	その他	瓦	トタン	その他
明治期以前	7	1	4	4	4	4	6	1	1
大正期	10	2	6	6	9	3	5	7	
昭和戦前期	26	5	16	15	30	1	7	24	
小計	43	8	26	25	43	8	18	32	

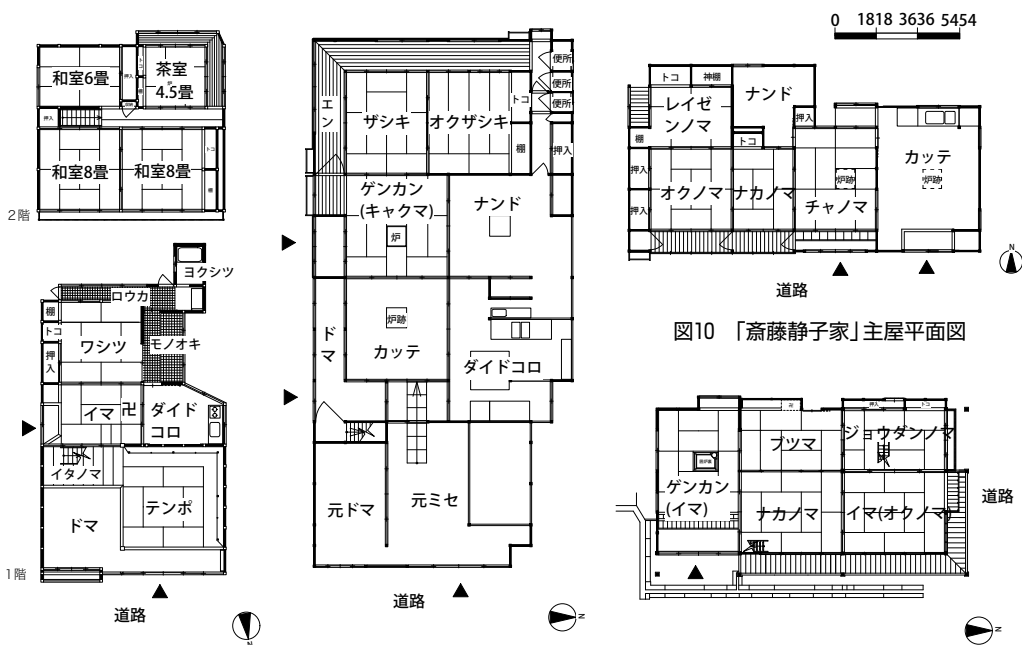


図8 「旧採進堂酒店」平面図

図9 「柳屋本店」平面図

図10 「斎藤静子家」主屋平面図

図11 「佐藤喜市郎家」主屋平面図



図12 「斎藤静子家」主屋外観^{注23)}



図13 カッテ北東に立つ独立柱^{注24)}



図14 「佐藤喜市郎家」主屋外観^{注21)}

在し、八幡寺までを結ぶ東西に伸びる道路沿いに、棟を平行にして平屋が建つ。構造は木造平屋建て、屋根は寄棟造鉄板葺(元茅葺)で、小屋組は又首組である。規模は桁行8間、梁間4.5間で、明確な建築年代は不明だが、家主(昭和8年生)によれば江戸時代の建築と伝えられる。内部は6室で構成され、整形六間取りの形式を採る。特筆されるのは、カッテの北東と北西の柱に製材されていない独立柱(図13)を建てる点である。これは、上屋と下屋で建物を構成する場合にみられる柱で、この形式では古式の建て方である四方下屋の造りを採る。この特徴は、「旧菅野家」(18世紀中頃、福島市、図15)や「旧奈良輪家」(18世紀中頃、福島市、図16)、「旧渡辺家」(19世紀初期、福島市、図17)などの江戸後期建築の民家でもみられることから、同家の主屋は、これらと同じ江戸後期以前に遡る可能性が高く、文化財建造物級の古さを持つ主屋と判断できる。

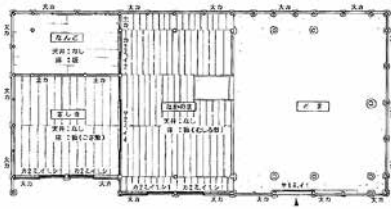


図15 「旧菅野家」平面図¹²⁾

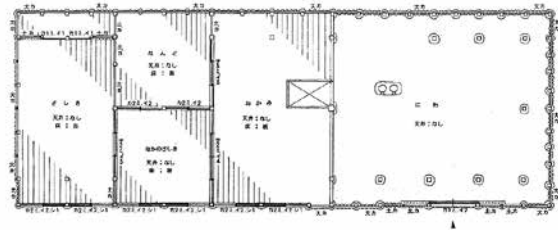


図16 「旧奈良輪家」平面図¹²⁾



図17 「旧渡辺家」平面図¹²⁾

(3) 佐藤喜市郎家主屋

佐藤家は江戸期から続く旧家で、農業を主生業とし、近代以降は貸家業も行っていた。明治期には質屋や飯坂地区内唯一の柿渋屋を営んでおり、質屋であった頃の名残で、現在も主屋北面に揚戸が残り、質札も見つかっている。主屋は八幡寺までを結ぶ東西に延びる道路沿いに面し、主屋と離れ、文庫蔵、穀蔵、雨家、便所、井戸小屋の7棟からなる。町家のような短冊状の敷地に奥行があり間口が狭いため、複数の附属家が密集して建つ。東西は住宅と隣接する。構造は木造一部2階建て、半切妻造の赤瓦を用いた葺き瓦葺で、小屋組は和小屋とする。ただし当初は茅葺の又首組で、明治期の大火後すぐに瓦葺に改造し、その際に小屋組みも改められた。半切妻造は、福島ではあづま造と呼ばれる屋根形式で、採光と通風が必要な養蚕民家で用いられる。地区内では明治20年のN家(湯町)でも確認でき、佐藤家では昭和35年頃まで養蚕を行ったという^{注25)}。規模は桁行7間、梁間3.5間である。建築年代は、製材された木材を土間や床上部に用いる点、材が太く、和釘の利用が確認できる点から、明治中期以前と推定できる。内部は5室で構成され、平面は整形四間取りである。特徴的なのは、民家でありながら商家風の意匠が至る所でみられる点で、北側妻面に揚戸を設け、縁側をL字型に廻して上部に出桁造を採用して正面を美しく整える。主屋と共に調査を行った文庫蔵では、「安政五年八月吉日喜平五十一歳 大工彦松作」の墨書きを発見し、年紀が判明する江戸期の土蔵は大変貴重である。規模は14尺×21尺と、桁行と梁間で基準尺が異なるのが特徴である。

7. 平面形式にみる飯坂の民家・町家の特徴

以上、町家2棟、民家2棟の平面を比較すると、基本的に同じ構成で部屋が配置されていることがわかる。土間を端に配置して座敷部を整形または食違とし、土間の反対側に最も格の高い部屋を配置して縁側を付す。民家と町家は、一般的に前者は農作業、後者は商いで、利用方法が異なるため平面形式が相違する。飯坂地区は、農村と町場の両方の特性を合わせ持つ在郷町として発展したこと、敷地が短冊状で建物の配置が規制されたことから、民家の平面を基本形に、敷地の形状や家格、時代の流行に対応して建築されたといえるだろう。

8. おわりに

以上により飯坂地区は、文化財や町の観光資源に利用される建物以外にも、数多くの歴史的建造物が残存し、民家や町家などの一般住宅においても、価値の高い貴重な遺構が隠されていることが本研究により明らかとなった。飯坂地区は、現在福島を代表とする温泉地として観光客に親しまれているが、町家と民家が混在して残存する特徴的な町といえる。これは、町そのものが時代に合わせて業態が変化したことが関係する。飯坂地区は、農村の性格が強い街から温泉を活かして旅館街が形成されて中心地が移動し、より温泉や関連商業に特化した集落に移行した。大火による区画整理により、地区ごとに業種が分けられ、共同浴場の整備に伴い住宅地が整備されたことで、農村と商業地、温泉街が混在する重層化した集落が構成され、飯坂独特の町並みが形成された。特に町並み景観を形作る町家は、年代により外観形式が異なり、大火や技術の進歩に合わせて形式が変化した。ただし内部の平面は、民家を基本系とし、当初の町の性格に起因して建物の業態に合わせて変化したもので、当初農村であった痕跡が、最も生活に関わる平面形状に現れたことは特筆される。

現在でも民家や町家、旅館といった明治期以前の建物が現存する地区では、往年の温泉街の雰囲気を感じることができる。しかし、摺上川沿いの旅館群の廃業や昔ながらの民家、町家の取り壊しが目立ち、観光客数はピーク時の半分以下にまで減っている。バブル期以降の温泉地は、ホテルや旅館のテーマパーク化が進行し、町へ繰り出す観光客が減少したことで温泉街の弱体化が進んでいる。飯坂町は、町を歩くことで様々な発見がある魅力ある町であり、活用可能な地域資源が数多く潜在する町といえるだろう。本研究の成果をまちづくりや観光業に寄与すべく、今後は飯坂町での講演を予定し、地域の方々と継続的に関わっていきたい。

注

- 注1) なかむらや旅館本館・新館、花水館奥の間(以上、国登録有形文化財)。
- 注2) 旧堀切家米蔵(福島市指定有形文化財)、旧堀切邸主屋・中の蔵・道具蔵・新蔵・書庫・表門(以上、国登録有形文化財答申中)。
- 注3) 『福島市史第8巻』(福島市教育委員会, 1968)の『上飯坂村絵図』を参照。
- 注4) 『飯坂温泉案内』(香味才助, 1895)の『飯坂真圖』を参照。
- 注5) 『飯坂湯野温泉史』(中野吉平, 1924)の『飯坂湯野温泉附近圖』と『福島市史資料叢書第74輯』(福島市教育委員会, 1999)の『飯坂湯野温泉附近圖』を参照。
- 注6) 『飯坂湯野温泉遊覧案内』(飯坂湯野温泉案内所, 1927)の『飯坂湯野見取平面圖』を参照。
- 注7) 江戸期は『福島市史第8巻』(福島市教育委員会, 1968)の『上飯坂村絵図』、明治期は『飯坂温泉案内』(香味才助, 1895)の『飯坂真圖』、大正期は『飯坂湯野温泉史』(中野吉平, 1924)の『飯坂湯野温泉附近圖』と『飯坂湯野温泉史』「福島市史資料叢書第74輯」(福島市教育委員会, 1999)の訂正復刻版『飯坂湯野温泉附近圖』、昭和戦前期は『飯坂湯野温泉遊覧案内』(飯坂湯野温泉案内所, 1927)の『飯坂湯野見取平面圖』を参考に、図1を作成した。
- 注8) 『福島市史資料叢書第74輯』(福島市教育委員会, 1999)のpp.44を参照した。
- 注9) 『福島市史資料叢書第74輯』(福島市教育委員会, 1999)のpp.43を参照した。
- 注10) 福島市の統計情報 住民基本台帳人口(平成30年5月) <https://www.city.fukushima.fukushima.jp/shimin-touroku/shise/tokejoho/1059//tokejohoh30/h3005.html>より。
- 注11) 飯坂温泉オフィシャルサイト <https://iizaka.com/stay/>より。
- 注12) 調査対象地区は、福島市飯坂町の道城町・馬場・湯町・湯沢・古戸・鯖湖町・十綱町・旭町・立町・古舘・横町・東滝ノ町・錦町・若葉町・夜蚊坂・八幡・東坂下の計17地区である。
- 注13) 建築年代は外観目視により推定し、詳細な建築年については家主等への聞き取り調査と福島市役所の協力により判断した。
- 注14) 『飯坂温泉案内』(香味才助, 1895)に掲載された明治28年頃の飯坂の様子を鳥瞰図で描いた『飯坂真圖』を参照した。
- 注15) 遠藤生花店所蔵。
- 注16) 筆者撮影。
- 注17) 筆者撮影。
- 注18) 筆者撮影。
- 注19) 筆者撮影。
- 注20) 筆者撮影。
- 注21) 筆者撮影
- 注22) 旧佐久間家板倉(福島市, 江戸末~明治期建築)など。
- 注23) 筆者撮影。
- 注24) 筆者撮影。
- 注25) 佐藤喜市郎(昭和23年生)の聞き取りによる。

参考文献

- 1) 今和次郎：草屋根，乾元社，1946。
- 2) 杉浦正一郎：芭蕉文集，岩波書店，1959。
- 3) 松平定信：退閑雑記，福島県史料集成第5輯，福島県史料集成刊行会，pp.661-674，1953。
- 4) 角川日本地名大辞典編纂委員会：角川地名大辞典7 福島県，角川書店，1981。
- 5) 東部鉄道管理局営業課：飯坂温泉案内，東部鉄道管理局営業課，1911。
- 6) 飯坂町公民館観光部：飯坂温泉を語る，飯坂温泉観光協会，1954。
- 7) 中野吉平：飯坂湯野温泉史，福島市史資料叢書第74輯，福島市教育委員会，pp.44，1999。
- 8) 香味才助：飯坂温泉案内，1895。
- 9) 福島県教育委員会：福島県の近代和風建築，1998。
- 10) 山形県近代和風建築総合調査委員会編：山形県の近代和風建築，山形県教育委員会，1998。
- 11) 福島県の近代化遺産(福島県文化財調査報告)，福島県教育委員会，2010。
- 12) 草野和夫：ふくしまの民家とその保存，歴史春秋出版，2001。

既報論文

- 1) 笹原理美：福島県飯坂地区における町家形式の変遷，2019年度日本生活文化史学会大会梗概集，pp.5-6，2019.9。

